



Title	桑園博士町「村会日誌」
Author(s)	池上, 重康
Citation	北海道大学大学文書館年報, 2, 95-122
Issue Date	2007-03-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43368">https://hdl.handle.net/2115/43368</a>
Type	other
File Information	2_95-122.pdf



## 〈 資料紹介 〉

## 桑園博士町『村会日誌』

池 上 重 康

はじめに

大学の敷地のことを一般にキャンパスというが、とりわけ総合大学においては、このキャンパス自体がひとつの町に匹敵するだけの規模をもっていることが多い。北海道大学では、現在、学生・教職員合わせて22,000人以上が生活し、札幌キャンパスだけでも177.6ha（札幌ドーム21個分、ドーム敷地の5.8倍に相当）の敷地面積を有する。そしてキャンパスを一步外に出ると、いわゆる「学生街」と呼ばれる、古本屋、喫茶店、定食屋、学生アパート、銭湯——一昔前のイメージではあるが——などが軒を連ねるエリアが大学キャンパスを取り囲むように存在する。仙台では片平丁、東京では本郷や高田馬場、京都では吉田、福岡では箱崎などが、これに相当するだろう。これとは別に、「学者町」や「大学村」などと称される、教員が住まうエリアもある。東京では西方町や大和郷、京都では北白川などがその代表であり、別荘地ではあるけれども、早稲田大学関係者による軽井沢南原別荘地や、北軽井沢の法政大学村も知られている。

札幌にも「大学村」と呼ばれる北海道大学の教官が集まって住んだコロニーがいくつか存在した。不思議とその住人の中には歴代の総長が含まれている。初代総長佐藤昌介の住んでいた北1条東7丁目の界隈、第2代総長南鷹次郎の住んでいた南18条西8丁目、そして、第3代総長高岡熊雄の住んだ北6条西12丁目界隈の「桑園博士町」、第4代総長今裕の住んだ北10～11条西3丁目の「医学部文化村」がそれである。この他、かつての第三農場敷地を教職員の宿舍用地に転用した北26条東3丁目付近の通称「大学村」もその仲間に入れてよいだろう。

## 1. 桑園博士町について

この中で、最も歴史が古く、かつ現在でも「大学村」の雰囲気を残しているものが「桑園博士町」である。その草創期の様子と、主な居住者などを、昭和2年9月の『北海タイムス』にみることができる。

処が（明治）四十二年高岡博士と時任博士がいま博士町と呼ばれて居る北六条の競馬場通りに家を建てたのを切っ掛けに新島、半澤、高杉、小倉の諸博士それに伊藤廣幾、高倉安次郎、吉川の諸氏が相次いで家を新築して面目を一新するやうになつた。最近に至つては宮脇、坂村、前川、山根の各博士は文化住宅を建て、

宮部博士も是について高壮なる邸宅を構えて博士町を形造つたのである。(括弧内引用者)

この他にも、実際にここに住んでいた半澤洵による次に掲げる文章からも、より詳細な「博士町」の様子が読み取れる。

この大学村(博士町)というのは、札幌市北六条西十二丁目と十三丁目の一角、オンコの生籬をめぐるした大学教授を中心にする古めかしい文化住宅の一群である。こゝに現在住んでいるのは、高岡、時任、星野、半澤各北大農学部名誉教授、高桑(工学部)、高倉(農学部)教授などであるが、過去には今は亡き宮部博士を始め、小倉、新島(農学部)、香宗我部(医学部)、井伊谷、久次米(工学部)、長尾(理学部)、和田(水産学部)、高杉(予科)、伊藤廣幾(代議士)の諸志なども住み、また現在の九大名誉教授田中義麿氏(農学部)や帯広畜大の宮脇富学長もこゝに住んでいた。なお大学に関係ない人でこゝに住んだ人々には奥村(医博)、善波(文学士)などがある。

この一角は大学から西南半キロメートルぐらいしか離れていないけれども、明治四十二年の頃には大学農場の一部に属し、少し湿地めいた牧草地であった。この住宅地の草分けは時任博士で、四十二年十二月こゝに始めて居を定めた。この新居建設中、農学講堂(引用者註：現在の農学本館ではなく、1901年竣工の旧農学本館のこと)二階の実験室にトランシットを据えて、工事中の大工監督をやつたことは、大学村開村物語として有名である。時任博士を先陣として前記各教授が次第に居をこゝに移してきた。

(宮部金吾博士記念出版刊行会『宮部金吾』より抜粋)

博士町の特徴の一つに、居住者が毎月1回持ち回りで、各自の家を会場に寄り合う「村会」という会合があった。「町」なのに「村会」とは些か妙な感じがするが、「博士町」というのは他者による呼称で、住民自身は「大学村」といっていたらしく、そのため寄り合いの会を「村会」と名付けたのであろう。大正元年12月に第1回を開催して以来、平成7年秋までの84年間、代替わりをしながらも継続した。

ところで、「村会」に相当する寄り合いを開いていたコロニーは他にもいくつかある。著名なものをあげてみたい。先に紹介した東京の巢鴨と駒込にまたがる大和郷には大正14年以来「大和郷会」という互助会があったが、戦災により大部分が焼失したのを期に終焉したし、堤康次郎が開発した目白文化村でも大正12年9月に「廿日会」という村会を開催して町内の親睦を深めていたが、戦中の昭和17年頃には活動を終えている。これらと比較しても、桑園の「村会」の特異性がより浮き立つことであろう。

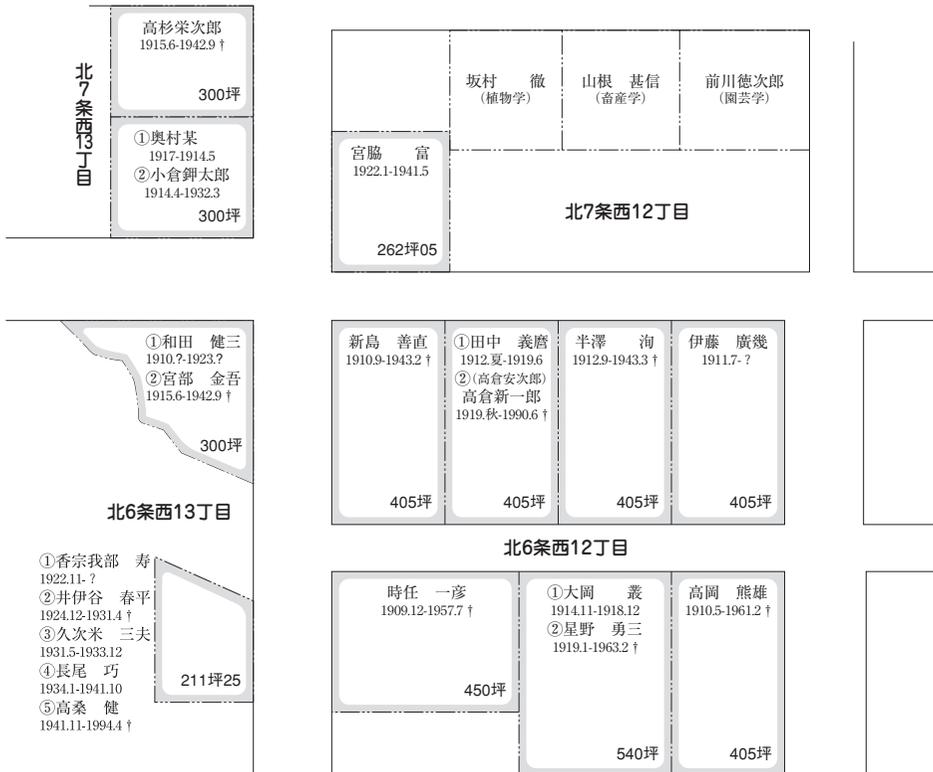


図1 桑園「博士町」配置図

上段：国土地理院所蔵。

下段：表1中、居住個所の判明した20名の氏名（丸付き数字は居住順）、居住期間（右肩↑は没年月）を記入した。なお、未入会者でも居住個所の判明したものは記入した。宅地面積は土地閉鎖登記簿に拠る。

表1 桑園博士町居住者一覧

氏名	生年出身地	学歴	職業	居住期間				
				1910	1920	1930	1940	1950
時任 一彦	明治4年鹿児島	明治30年札幌農学校	農・農芸物理学					
高岡 熊雄	明治4年島根	明治28年札幌農学校	農・農政学					
新島 善直	明治4年東京	明治29年東京帝大	農・林学					
和田 健三	万延元年長野	明治20年札幌農学校	農・水産学	?				
奥村 某	不明	不明	医学博士	?				
伊藤 廣幾	岩手	明治26年札幌農学校	代議士			?		
田中 義磨	明治17年長野	明治42年東北帝大農科大	農・動物学					
半澤 洵	明治12年北海道	明治34年札幌農学校	農・応用細菌学					
善波 功	明治9年福島	明治36年東京帝大・文	庁立札幌第一中学校長					
小倉鉦太郎	慶応元年岐阜	明治28年東京帝大・農	農・獣医学					
大岡 叢	明治14年和歌山	明治41年東京帝大・法	大学事務官					
高杉栄次郎	慶応3年青森	明治26年ボストン大Ph.D	予科・英語					
星野 勇三	明治8年山形	明治34年札幌農学校	農・園芸学					
宮脇 富	明治16年島根	明治35年札幌農学校	農・畜産学					
香宗我部寿	明治15年滋賀	明治41年京都帝大福岡医科大	医・耳鼻咽喉科			?		
井伊谷春平	明治14年静岡	明治40年東京帝大・工	工・機械工学					
宮部 金吾	万延元年江戸	明治14年札幌農学校	農・植物学					
久次米三夫	明治26年徳島	大正10年東京帝大・工	工・機械工学					
長尾 巧	明治24年福岡	大正10年東北帝大・理	理・地質学					
高桑 健	明治30年石川	大正11年東京帝大・工	工・鉱山工学					
高倉新一郎	明治35年滋賀	大正15年北海道帝大・農	農・農業経済学					入会

## 2. 『村会日誌』

桑園博士町の『村会日誌』は、現在も博士村に居住する星野家が所蔵している。そのうち、第400回までを記録した第一冊と第二冊のページを繰りながら、博士町の歴史と歩みを繙いていきたい。

### 第壱回 大正元年十二月 時任氏宅ニ於テ開会

来会者 高岡、新島、和田、奥村、田中

#### 決議事項

集会費用ハ五拾銭ヲ出テザルコト

会日ハ毎月第三又ハ第四土曜日トスルコト

会場ハ居住ノ順ニヨリテ各自廻リ持チノコト

別途会場を設けたり、無理な会費設定をしなかったところに、この村会の長寿の秘訣があったのであろうか。無理を避けるという意味から「五拾銭を越えた場合には罰金をとろうか」という案さえでたという。

『村会日誌』には、開催年月日、会場を提供する当番、そして参加者が基本情報として記録される。さらに重要事項が当番の判断により記される。以下、基本情報のみの回の記録は割愛し、特記すべき回の記録から、博士町の動きを追っていくことにしたい。

- 第四回 大正二年三月 当番 和田  
電灯点灯ノ件決議ス
- 第六回 大正二年五月 当番 田中  
善波君入会ス
- 第八回 大正二年七月 当番 時任  
半澤君入会
- 第十二回 十一月 当番 半澤  
菊見ヲ兼ねテ
- 第十三回 十二月 当番 新島  
聖主降誕会ヲ

北大（厳密には当時は東北帝国大学農科大学）の教官は、その前身である札幌農学校初代教頭クラークによるキリスト教に基づいた道德教育の伝統を受け継ぎ、クリスチャンが多かった。博士町の住人もまた、クリスチャンが多かったことを物語る。

- 第十八回 大正三年五月 当番 新島  
奥村氏送別会、小倉氏入会
- 第十九回 六月 当番 和田  
半澤氏入会
- 第二十四回 十一月 当番 時任  
大岡氏入会
- 第二十八回 大正四年四月 当番 田中  
桑園火防組合ヨリ寄附金募集ノ申込アリ金五円宛ヲ寄附スベキコトヲ決議ス
- 第二十九回 五月 当番 半澤  
札幌神社祭礼寄附金ハ当区年番ニ当ルトキハ金壹円宛其他ノ時ハ金五拾銭宛ヲ寄附スベキコトヲ決議ス
- 第三十回 六月 当番 善波  
高杉氏入会、電灯仮決議、会誌備付ノ件決議ス
- 第三十二回 八月廿八日 当番 大岡  
決議事項
- 火防組合費八月廿五銭宛出金スルコト
  - 既定決議タル点灯ノ件ヲ実行スルコト
  - 会員ノ族籍氏名ヲ記載スルコト
  - 散会ハ夜半十二時、蓋シ新レコードなりとか

族籍氏名は、『村会日誌』の第一冊の巻末に記載されている（図2）。本籍と族称、氏名のほか、博士町への居住開始年月日を書いているものもある。

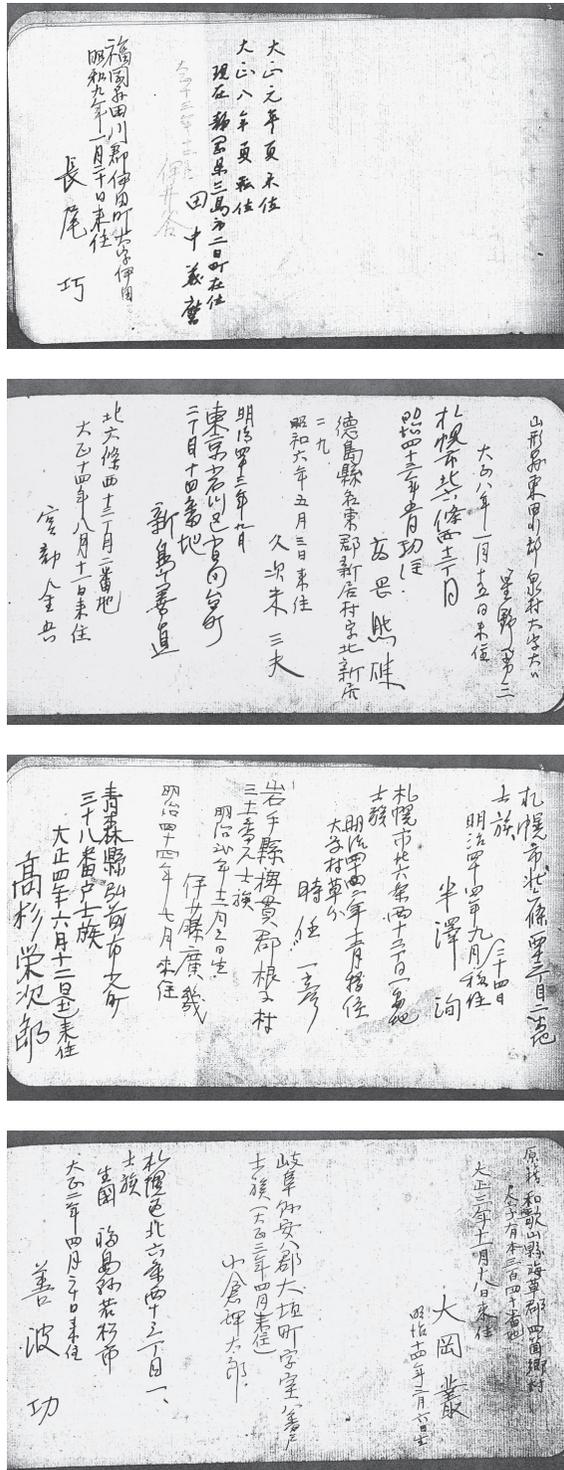


図2 村会参加者  
星野家所蔵『村会日誌』第一冊巻末より転載。

第四拾壹回 大正五年五月二十七日 当番 田中

決議事項

- 一、火防組合費ハ五、六両月ハ金三十五錢トスルコト
- 二、消火器備付ノ件ハ各自ノ随意トスルコト

第四十二回 大正五年六月八日 当番 小倉

決議事項

- ・札幌神社大祭ニ付出金ハ壹円之事
- ・桑園山車費用寄附ハ謝絶之事

第四十三回 大正五年七月廿六日 当番 大岡

決議事項ハナシト雖談話ノ主題ハ大学村ノ宅地問題ナリシ之レ当村会ノ存亡ニ関スル事項ナレバナリ

この後、度々、宅地問題が村会で話題となる。「博士町」住人は大学用地を自身の宅地として購入したいが、大学側がなかなか応じてくれないというのが、当初の懸案であった。

第四十五回 大正五年九月三十日 当番 時任

田中君ハ帰省中和田君ハ差間アリテ欠席

善波君宮崎県延岡中学校長ニ転任不日出発ニ付其送別会ヲ兼ネ行フ

夫人出席者ハ

大岡夫人、高岡夫人、半澤夫人、新島夫人、高杉夫人

この頃から、欠席者の欠席理由が記されるようになる。第45回は送別会を兼ねたこともあり、村会に初めて夫人が出席した。

第四拾六回 大正五年十月二十九日 当番 和田

北五条ニ三等郵便局設置ニ関シ時任氏取調事項ノ報告アリ之ヲ議題トシテ各員ノ名論聞出就中将東村会ノ後援ニ依テ置局ニ至ラハ当業者ハ村会ニ保証金ヲ提供スルノ義務アルヘシトハ村会式卓説ヲ發揮シテ□越無モノナラン□□但決議ニ不至散会（□は判別不能、以下同：引用者註）

第四十七回 十一月廿五日 当番 高岡

伊藤議員ヨリ書面ヲ以テ提出セシ左ノ議案ヲ相談ス

- 一 賃貸土地払下ノ件
- 一 東京沢庵直輸入ノ件
- 一 千葉県産キコ万醤油共同購入ノ件

右議案ノ内第一ハ村会ニ於テ更ニ相談スルコトニ第二及第三ハ本年ハ暫ラク見合スコトニ決定セリ

件の土地問題に加えて、食料品の共同購入について話し合っている。千葉県産キコ万醤油とは、千葉県野田市のキッコー萬醤油のことであろう。

第四十八回 十二月廿七日 当番 新島

昨日めづらしき大砲電なりき

宿かせと刀拔出すふじき哉 蕪村

第五十回 大正六年二月二十四日 当番 田中

大学ヨリ札幌区ニ譲与スベキ土地中ヨリ村会所在地ヲ除外スルコト及ビ若己ムヲ得ズンバ会員ニ売渡スコトヲ学長及農場長ニ陳情スルコトヲ議決シ交渉委員トシテ和田、新島、時任三氏推選挙ス

第五十四回 大正六年七月二十一日 当番 時任

従来ノ懸案タル北海道大学設立後ニ於ケル吾々ノ場地ノ処分問題ニ就キ討議ノ末余テ選定セル委員ニ於テ学長ニ請願書ヲ提出スルコトトナル

東北帝国大学農科大学から北海道帝国大学への単独帝大の昇格にあたっての資金が不足し、その調達のため、大学は所有地の払い下げを積極的に行なっていた。これに合わせ、桑園のこの一帯の土地の払い下げについても、「博士町」住人が交渉のための動きを起こしはじめた。この後も度々、村会の話題にあがるが、具体的な解決は見られない。

第五拾五回 九月廿二日 当番 高岡

火防組合費月三銭増加請求ノ件ハ承諾ヲナサルコト

電灯委員ヨリ大正五年秋以後ノ電灯料請求ニ就テ報告アリ

第六十五回 大正六年七月廿七日 当番 高岡

博覧会開会中夜廻賃五拾銭ツ、支出ノ件可決

第七十回 大正八年一月廿五日 当番 小倉

本月ヨリ夜番銭五銭増加ノ件請求アリシモ理由調査シ上承諾ヲ与フルコトニ決ス  
本月ヨリ星野君入会セラル

第七十一回 二月二十二日 当番 高杉

一月分ヨリ夜警番ニ五銭ヲ増スコトニ決ス

電燈ノ注意ハ時任君ヨリ始メ一年毎二代ハルコトト相談一決ス

第七十二回 三月二十九日 当番 星野

附記 大岡君旧秋去り星野君一月ニ来り始メテ当番トナル

第七十四回 五月三十日 当番 高岡

田中君ニ他ニ転居ノ為メ本日ハ送別会トナレリ

第七十六回 八月三十日 当番 和田

街燈点火を五条通りと共同し□ある由し三国屋より半澤君迄申入れたる由報告あり

第八十二回 大正九年四月二十三日 当番 新島

雪かきの入夫二十三条通りの方ハ道つけをせぬ故割前を出さぬと云う事になる

第八十五回 七月三十一日 当番 半澤

議題、桑園火防寄附金并ニ中央創成小学校五十年紀念寄附金ニ就キ決議す

一 火防の方ハ火の見梯子立替の方ニのみ各自金一円宛寄附ニ決す

- 一 小学校の寄附ハこれも各自壹円宛高杉君ハ特別との事に決定
- 第八十九回 十一月廿七日 当番 時任  
本会モ百回ノ時ハ何カ記念ノ催ヲシテハ如何トノ提議ニ対シ来会者賛成セリ
- 第九十一回 大正十年一月三十一日 当番 新島  
電燈（街燈）町より分離し負担金決議
- 第九十二回 二月二十六日 当番 和田  
桑園郵便局設置ニ関シ種々ノ談話アリ其他雑談ニ打興シテ十二時散会  
蓋シ記録破リナリ
- 第九十三回 四月一日 当番 星野  
大学地代ノ事ニテ相談ノ要アリシモ半澤、小倉、高杉皆差悶アルヲ以テ星野代リ  
テ当番トナレリ  
地代更正ハ大学村ヲ特別扱トナスベキ様相談アリタリ

それまで、払い下げを念頭に置いていた土地問題であるが、ここでは、土地の賃貸料に関する相談となっている。また、『村会日誌』内に初めて「大学村」の文字を確認できる。「博士町」の呼称は、新聞などにみられるだけで、住民自身は「大学村」と呼んでいたのであろう。

- 第九十八回 大正十年十月一日 当番 時任  
特記スヘキコトナキモ屋根ノ亜鉛葺ノ話カ出テ今カ廉クテ好様ト云フ人ト来年ノ方カ良ト云フ人トガアッタ

屋根を亜鉛葺き（いわゆるトタン屋根）にすべきかが話題となっている。それまでの火防の話などから判断すると、この時点では、桎などの可燃材で屋根を葺いていたことが推察される（図3）。

- 第百回 大正十年十一月廿六日  
第一百回の会を当番新島方ニ開く、紀念の  
為め家族も出来るだけ会合することに定  
めたるも小倉高岡高杉欠席  
出席者ハ左の通り  
伊藤廣幾、星野勇三、全岩恵、時任一彦、  
全美知、和田健三、全逸子、全富貴、  
半澤洵、全美加、新島善直、全栄子



図3 建築間もないころの新島邸  
屋根が桎葺きである様子がわかる（大学文書館所蔵）。

大正元年12月の第1回から約8年で100回目の村会を迎えた。家族も参加とあるが、実際には、夫人の参加に留まり、当人欠席の場合には夫人の出席がない。

第百五回 五月二十七日 当番 宮脇

村会員の肥汲取ノ権利ヲ大学果樹園ニ与フル件可決

近来諸種ノ刊行物ニ対シ広告ヲ強議スルモノアリ如斯者ニ対シテ村会ノ決議ニヨリ諾否ヲ決定スベキモノナル旨申渡ス件可決

宮脇富の入会に関して、特に記録はなく、第102回から出席者に名前がみられる。『村会日誌』巻末の族籍氏名記入欄にも、宮脇の記載はない。

第百六回 七月一日 当番 時任

村会過去ノ成績ヲ見ルト第一回（大正元年十二月）カラ前回迄百五回此月百十四ヶ月デアルカラ其間二九回止メタコトニナル、而シテ十二回廻ツタコトニナツテキマス

即一廻リガ平均八軒四分ノ三デス

第百十六回 大正十二年九月二十二日 当番 半澤

東京大震災ノ寄附金ノ件につき相議ナリ

第百三十三回 大正十四年九月二十七日 当番 高岡

宮部君入会

和田健三転出の住宅に、退官にともない植物園長官舎から宮部金吾が転居してきた。ただし転居にあたり旧和田宅に大幅に手を加えたという。

第百四十四回 昭和二年一月二十二日 当番 半澤

昨年十二月開会し筈なりしも聖上陛下御登避したため延長せり

第百四十六回 昭和二年四月二十九日 当番 高杉

星野君台湾修学旅行土産パパイヤーヲ持参 試食スル



図4 宮脇邸（後の古谷邸）外観

宮脇が転出後は、古谷商店の古谷辰四郎が居住した。大正10年建築のコンクリートブロック造りで、ブロックは宮脇がアメリカから輸入した成型機で造った（平成5年筆者撮影）。



図5 大正末ころの「博士町」の様子

写真の右の板塀は手前が星野邸、奥が高岡邸のもの（大学文書館所蔵）。

第百五十一回 昭和二年十二月一日 当番 時任  
魔の踏切之延命地蔵の問題で一時光が咲く

現在は立体交差になっているが、石山通り（西11丁目通り）と、鉄道の線路が交差するところでは、投身事故が屢々あった。そのため「魔の踏切」の俗称で呼ばれていた。

第百五十六回 June 30, 1928. 当番 高杉  
七時ヨリ十時頃迄「ラヂオ」ヲ聴キ…

第百五十八回 昭和三年八月二十八日 当番 宮部  
桑園私設消防委員よりガソリンポンプ売台購入費中へ寄附申込アリタルヲ以テ協議の上村会員各自五円づゝ寄附することに決す

第百六十回 昭和三年十一月二日 当番 宮脇  
宮脇君洋行土産の活動写真映写ありたり

本来、当番が日誌を記録するものであるが、宮脇が当番であるにもかかわらず、自身に「君」をつけている。筆跡から高岡の代筆と思われる。

第百六十一回 昭和三年十一月十六日 当番 高岡  
大学より土地を買ふか買はぬかと半公式な問合せがありたので臨時に村会を繰上げて開き、相談の結果買ふ意志なき旨を差申することにする 但し廉けれハ買はぬものでもないとのことは云い添へることにする。

土地問題に関して、ようやく大学側より売却の話が来たものの、高価であったため、買い取りを見送った。

この頃、高岡家では病弱な長女のためにサンルーム付きの二階屋を増築した（図6）。

第百七十回 昭和四年十二月二十一日 当番 宮部  
千種有功卿の双幅並に小刀等を一覧に供す  
一、島判官記念碑建立につき村附額を（宮部を除き）金二十円と取極めたる旨  
高岡君より報告ありたり

第百七十一回 昭和五年二月五日 当番 時任  
明日大学記念日ナル故此日開ケリ

大正8（1919）年2月6日の勅令により、同日が北海道帝国大学の記念日となっていた。現在の開学記念日（8月14日）とは違った感覚のものであろう。

第百七十三回 一九三〇、三、二九 当番 新島  
小倉氏より家族一同東京に移りて自宅にて村会を開くことも不可能なれば当分退



図6 高岡邸の増築部分

南面にはサンルームが設けられていた(大学文書館所蔵)。



図7 星野邸外観

(平成6年筆者撮影)

会しひしとの申出ありたれど全会之を認めざることに決し同氏方にてハ都合のよくなるまで村会を開かずともよきこと、せり

第七拾六回 昭和五年九月廿九日 当番 星野

八月ハ休暇の為め出席者少なき様なれば休会

本月の廿七日の土曜ハ理学部開学式あり 翌日曜は又会員中支障多き為め月曜ニ開会せるものなり

第七拾九回 昭和六年一月廿八日 当番 宮部

会半にして佐藤男急病の報に接し中坐し九時半頃帰宅せしに一同散会されし後なりし

佐藤男は前総長佐藤昌介のことで、男は男爵の略。村会メンバーの中では、宮部金吾のみが病床へ駆けつけたことがわかる。

第八拾壱回 昭和六年五月三十日 当番 高岡

四月八日会員井伊谷君病氣の為逝去せらる

久次米氏の入会を勧誘することを決議す

第八十九回 三月二十二日 当番 時任

小倉君二三日中ニ札幌ヲ全ク引揚ケラル、ニ付其送別ヲ兼ネテ例会ヲ開ク

第九拾貳回 八月二十九日 当番 半澤

三浦環女史の独唱 ラヂオニュースを聞き…

第九十五回 昭和七年十二月廿七日 当番 星野

先月当番なりしも新築の家未だ不備の処多かりしを以て宮脇氏とくりかへ貫ひしものなり

星野勇三は、「村会」の創設期メンバーである大岡が以前に住んでいたであろう明治末の洋館を取り壊し、昭和7年9月に自邸を新築した。竣工後2カ月近くも不備に

悩まされていたことになる。なお、この住宅は現存する（図7）。

第二百回 昭和八年九月二十七日 当番 新島

第百回のはきは記念会をしたので第二百回も記念の為め家族一同の会としやうと云ふことになりました

時任一彦、梅、宮部金吾、高岡熊雄、愛子、宮脇富、末子、久次米三夫、文子、半澤洵、美加、星野勇三、岩恵、新島栄子  
高杉氏は差支ありて不來なりしは遺憾でした

最初の100回まで約8年かかったが、次の200回までは約12年の歳月を経た。100回毎の記念に家族で——といっても夫人同伴のことであるが——集まることにした。

第二百二回 一九三二年十二月二十七日

此日久次米君ノ送別会ヲ兼ネ歓談

西暦の横に（？）の書き込みがある。正しくは1933年。当番の記載がないが、順番と筆跡から高杉が当番である。

第二百三回 昭和九年二月三日 当番 星野

久次米氏の後に理学部の長尾氏転宅し来りたるを以て当番より同氏ニ入会勧誘する事ニ決定

第二百六回 昭和九年七月五日 当番 時任

出席者

星野氏夫妻、高岡夫人、半澤氏夫妻、  
長尾氏、宮部氏、高杉氏夫妻、  
宮脇氏夫妻、新島夫人

時恰も薔薇の花盛りであるから夫人同伴観覧を願ふ

尚ほ薔薇の花期を待った為村会が一ヶ月後れたこととお詫します



図8 時任一彦

時任は当時、薔薇の品種改良の先駆者として有名であり、自邸の庭には薔薇の花が咲きほこっていた。この回は時任が当番だったこともあり、薔薇の最も美しい時期に開会を合わせ、かつ夫人も同伴して会を楽しんだ。以後、薔薇が咲くと、時任が村会に持参するという習慣が定着する（図8）。

自宅庭の薔薇を手入れする晩年（大学文書館所蔵）。

第二百十一回 昭和九年十二月廿八日 当番 星野

宮部半澤宮脇三氏ハ台北大学ニ於て開催の学問大会に出席の為め不在なりしも年末なれば開会せり

第二百十三回 昭和十年三月五日 当番 宮部

佐藤義夫君を招待したるに遠慮辞退さる

佐藤義夫は林学助教授。桑園のどこに居住したかは不明であるが、「村会」への入会を辞退されたのは初めてのことである。冒頭に示した新聞記事に見るように、この頃、坂村、前川、山根の各農学部教官も「博士町」周辺に居住していたが、「村会」へは招待されていない。後に入会することになる高倉新一郎ですら、「村会」発足時に、ここに居住していたにもかかわらず、「村会」へは未だ入会していない。

第二百十五回 昭和十年六月一日 当番 時任

(附記) 七月六日臨時村会を開き夫人同伴で薔薇を觀賞して貰ふ

佐藤男爵夫妻も来会せらる

佐藤男爵とは元総長佐藤昌介のこと。

(第二冊)

第二百二十二回 昭和十一年二月二十七日 当番 宮部

二・二六事件に関し話し合ふ

第二百二十五回 昭和十一年六月十三日 当番 新島

話題

- ・大演習行幸と大学
- ・日食観測 等

第二百二十九回 昭和十一年十二月二十八日 当番 高杉

特ニ札幌農学校時代ノ興味アル回想ニ時ノ移ルヲ忘レタリ

第二百三十三回 昭和十二年四月二十九日 当番 時任

高杉氏明後日出発四度渡米セラル、ニ付其壮行会兼又、尚近年新案ニ係ルストー  
ブヲ据付ケ研究ス

第二百三十五回 昭和十二年七月二日 当番 新島

時任氏よりバラの花を送らる

第二百三十六回 昭和十二年七月二十七日 当番 半澤

実ハ高岡氏、星野氏、宮脇氏ノ渡満ノタメ壮行ノ意味ニテ開キモノナリ

同年には、日滿農業政策審議委員会が開催されている。おそらくここに記された三氏は、これに出席するために渡満となったのであろう。

第二百四十九回 昭和十三年十二月二日 当番 宮部

ラヂオの夕 原智恵子(川添夫人)のピアノ其他を聞き楽しき一夕をすごす

第二百五十回 昭和十三年十二月二十八日 当番 長尾

恰モ山岳部員十勝岳ニテ遭難ノ報アリ

4名のパーティーのうち3名が雪崩に巻き込まれ、2名が死亡した惨事であった。

- 第貳百五拾壹回 昭和十四年一月卅一日 当番 時任  
東大経済学部ノ教授辞職問題が時事問題トシテ話題トナツタ
- 第貳百五拾参回 昭和十四年三月七日 当番 新島  
宮部君の満八十歳の御祝ひを兼て例会を此日ニ開く  
星野君旅行中にて不在なりしハ残念  
記念の写真を採る

この時に撮影した写真が、現在、北海道大学大学文書館に所蔵されている（図9）。

- 第貳百五拾六回 昭和十四年七月廿八日 当番 星野  
日英会議及日米通商条約破棄に関する話題賑ふ
- 第二百六十一回 昭和十五年一月二十四日 当番 高岡  
本日は紀元二千六百年最初の会合でした。
- 第二百六十二回 昭和十五年三月廿五日 当番 新島  
当日時任より公区成立の報告あり

公区の区域は、現在の町内会程度の規模で、それらをまとめた聯合公区は、現在の連合町内会とほぼ規模を同一にするものである。

- 第二百六十六回 昭和十五年八月三十日 当番 宮部  
高杉君病氣全快久々にて出席、一同の歓迎を受く
- 第二百六十八回 昭和十五年十一月二十四日 当番 長尾  
紀元二千六百年祝典に関する談に華咲く  
この頃西園寺公薨去
- 第二百六十九回 昭和十五年十二月廿六日 当番 時任



図9 第253回村会

1939年3月7日、宮部金吾満八十歳のお祝いを兼ねて開会（森田写真館撮影）。  
後列左より長尾巧、宮脇富、新島栄子、新島善直、半澤洵。前列左より高岡熊雄、宮部金吾、高杉栄次郎、時任一彦（大学文書館所蔵）。

新島君は脚部の負傷未だ全く癒らず杖をついて来り

高岡君は頭部に繃帯をして来る

第二百七十四回 昭和十六年一月二十八日 当番 高岡

本日の会合は第二十七世紀最初のものでした

第二百七十一回 昭和十六年二月廿七日 当番 新島

本日の事故、廿四日に星野浩二君旭川に入隊、即日解除

第二百七十三回 昭和十六年五月十日 当番 星野

去月廿九日高杉家慶事

帯広高等獣医学校長新任の宮脇氏来札したるを口ひに急遽開会せるなり

談は多く宮脇新校長を中心として…

第二百七十五回 昭和十六年七月九日 当番 宮部

時任君の丹精にかゝる薔薇目下満開、請ふて数枝を得たり。席上為に雅趣を添ふ

第二百七十六回 昭和十六年八月十八日 当番 長尾

長尾氏宅ニテノ最后ノ会合ナレバ特ニ記念写真撮影ス。

本日モ時任氏ヨリ薔薇ヲ贈ラル

この時の写真は森田写真館が撮影した (図10)。高岡と宮脇は欠席。

第二百七十七回 昭和十六年九月十六日 当番 時任

長尾氏不日仙台へ転任ニ付其ノ送別ノ意味モ含マレタ村会デアツタ。長尾氏ハ昭和九年三月第二百四回ノ村会ニ始めて出席、満七ヶ年半在村せられた

第二百七十八回 昭和十六年十月十一日 当番 高岡

高桑君の入会に関し相談

明日より防空訓練実施故話は自から主として此の問題に関したのもの

第二百七十九回 昭和十六年十一月四日 当番 新島

高桑君今回初めの出席

時任君より防空基地の話あり

第二百八十回 昭和十六年十二月十六日 当番 半澤



図10 第276回村会

1941年8月18日、長尾巧転出にあたり、長尾邸にて最後の村会 (森田写真館撮影)。左より長尾巧、長尾巧夫人、時任一彦、宮部金吾、星野勇三、高杉栄二郎、半澤洵、新島善直 (大学文書館所蔵)。

大東亜戦争に関する話にて終始す

旧会員たりし香宗我部寿君御逝去、本日北一条教会に於て告別式あり、全員出席御冥福を祈れり

第二百八十一回 昭和十七年一月廿二日 当番 星野

特記すべき事無し 但し話ハ大東亜戦争に関する事多かりし

第二百八十四回 昭和十七年五月七日 当番 時任

本年は札幌の桜早く已に満開なりとの話

第二百八十五回 昭和十七年六月五日 当番 高岡

本日は今夕満洲旅行の途に上る星野君の壮行会を兼ねた

第二百八十六回 昭和十七年七月二十三日 当番 新島

時任君終りのバラの花を持参しテーブルを飾らる

第二百八十七回 昭和十七年九月二十三日 当番 半澤

高岡家よりダリアの花、時任家より薔薇の花を頂く

本日の出来事は高杉君の逝去、新島氏女婿高橋太郎君南方進出の為退札等でした

高杉は第284回より病気のため欠席を続けていた。「博士町」に居住しながらの村会員の逝去は初めてのことであった。

第二百八十九回 昭和十七年十一月五日 当番 星野

星野より物資不足の折柄村会にてハ菓子果物等に二種以上出さゞる事との提案を為せる

第二百九十一回 昭和十八年一月十二日 当番 高桑

戦勝第三年初ノ会合ニテ全員出席 例ノ如ク和カニ酷寒ノ一タヲ送ル

昭和15年には「紀元二千六百年」、翌年には「第二十七世紀」という時局を反映した表現がみられたが、ここでは大東亜戦争突入三年目を「戦勝第三年」と記している。

第二百九十二回 昭和十八年二月二十八日 当番 時任

新島君本月七日逝去セラレ村会員六名トナル

柳家小さんノ「鍋焼」ヲ聴ク

高杉の逝去に続き、「村会」創設時からのメンバーの一人である新島も亡くなった。「村会」構成メンバーの高齢化は否めない。

柳家小さんは4代目で、「鍋焼」とは、4代目小さん十八番の「うどんや」のこと。

第二百九十三回 昭和十八年三月廿九日 当番 高岡

本月十日半澤老人逝去せらる 享年九十歳

半澤老人とは半澤洵の尊父。洵の留学中は、尊父が洵の代わり村会に出席していた。

第二百九十四回 昭和十八年四月二十六日 当番 半澤

第三百回ハ間近ナルガ模様替ヲナシ外ニテ開催シラハトノ話合ス

第二百九十七回 昭和十八年七月三十一日 当番 高桑

近年珍らしき暑さなり

星野氏は財部大将出迎のためや、遅刻なりき

番外村会 昭和十八年九月十一日

高杉栄次郎君逝て一周年高杉氏宅にて記念の番外村会開かる

高杉年雄、直幹両氏主人役を勤め教会関係者として中尾夫人も出席し、故人が在世中何よりも愛好せる村会を開く事に依り故人の霊を慰めたる訳にて意義深き会合であった。

第二百九十八回 昭和十八年九月廿六日 当番 時任

全員出席、試に六人の会員の会歴を調べて見ると

高岡 } 第一回 大正元年十二月  
時任 }

半澤 第八回 全 二年七月

(註 半澤氏洋行中先考出席セリ)

星野 第七十回 全 八年一月

宮部 第三百三十三回 全 十四年九月

高桑 第二百七十九回 昭和十六年十一月

第二百九十九回 昭和十八年十月二十二日 当番 高岡

本月本日半澤さんにて御孫さん(男)御誕生日出度

第三百回 昭和十八年十一月二十九日 当番 半澤

(粉雪降る)

出席者

宮部氏、高桑夫人、高岡氏、全夫人、時任氏、全夫人、星野氏、全夫人、  
新島夫人、半澤、美加  
の十一名

記念之為め写真を取りしも成否不明

第200回から第300回まで約10年かかった。今回も夫人同伴とし、記念写真を撮影したらしいが、現在、その写真は伝わっていない。

第三百四回 昭和十九年四月三十日 当番 時任

在ジャワ高橋太郎君の年詞に対し寄せ書の葉書を出す

第三百六回 昭和十九年六月二十八日 半澤

時任サンカラ奇簾ナ薔薇ノ花沢山頂キ一段ト光彩ヲ放チマシタ

新島栄子、全正之両氏ニ寄せ書ヲ認ム

第三百七回 昭和十九年七月三十日 当番 星野

街燈ハ全部消燈の事ニ決定セリ

第三百九回 昭和十九年九月十八日 当番 高桑

時任先生より美しきバラを頂く  
「ニッセイ」納豆菌話題となる。

「村会」メンバーの一人である半澤洵は、「納豆博士」として広く名を知られていた。

- 第三百十回 昭和十九年十一月四日 当番 時任  
当日九時の放送はレーテ島陸上部隊の戦果を報道せり
- 第三百拾壺回 昭和十九年十一月二十八日 当番 高岡  
今晚五寸六分積雪、是れ本冬に於し始めての大雪であった
- 第三百十三回 昭和二十年一月二十六日 当番 星野  
出席者ハ半澤氏二人のみ  
出席当番とも二人とハ本村会記録の最初なり
- 第三百十四回 昭和二十年三月三日 当番 宮部  
全員出席され近来になき盛会であった

第313回の出席者わずか2名（「村会」史上最小人数での開催）を受けてか、次の第314回には全員出席となった。戦況は悪化しているのであろうが、「村会」ではそれに関する話題はほとんど記録されない。

- 第三百十五回 昭和二十年五月五日 当番 高桑  
延期をかきねたりしこの会誠に申訳なき次第なり
- 第三百十六回 昭和二十年八月三十一日 当番 時任  
時局の為とは云へ当番の怠慢にて甚しく延期せる村会は二三日中に停戦協定の打  
結せられんとする今日開かれ、沈痛なる思ひの中にも和やかに驩談を交わし

終戦を挟んで約4カ月間、村会の開催が滞っていた。やはり時局の反映であろう。

- 第三百十七回 昭和二十年九月二十二日 当番 高岡  
星野君出席の予定なりしも急に欠席、可愛き御孫さん初見参の為め小樽行きとあれば是れもなし
- 第三百十八回 昭和二十年十月二十七日 当番 半澤  
ストブの初焚で和やかな会合でした
- 第三百二十一回 昭和二十一年一月七日 当番 高桑  
例の如く和やかなる会合にて新年を喜びあひたり
- 第三百二十二回 昭和二十一年二月二十二日 当番 高岡  
本夕は最近宮部博士が文化勲章功授与せられたるを祝し合ひたり
- 第三百二十六回 昭和二十一年八月二十六日 当番 高桑  
時任先生より目もさむるばかりのバラの花を頂き目を娱しませて歓談し十時散会  
す
- 第三百二十七回 昭和二十一年九月二十三日 当番 時任

扱て当夜の話題は先ず昨夜高岡、星野、時任と軒並に竊盗に狙はれ殊に高岡さんは実害を被りたる事件に始より少時此話に花が咲きたる後時節柄馬鈴薯、南瓜、大根の話になり…

戦後の食糧難を反映してか、じゃがいも、かぼちゃ、大根が話題にのぼっている。大学構内でもキャンパス内のほとんどの空地进行を畑に充て、食料を生産していた。

第三百二十八回 昭和二十一年十月十日 当番 高岡

村会ハ成可く月夜のとき聞く様宮部氏の兼ての希望あり本月満月の晩に開いた

村会の第1回で取り決めたように、それまでは原則月末の土曜日に開催していた村会であるが、宮部金吾は高齢であることから、帰宅時に夜目が効く満月の夜に開催して欲しい旨を要望していた。これ以後、満月に近い日を選んで、村会が開催されるようになる。

第三百二十九回 昭和二十一年十二月七日 当番 半澤

宮部先生の希望通り満月ニ近ク明日は月蝕ナリ

第三百三十一回 昭和廿二年二月八日 当番 宮部

財産税申告に関し話があり…

第三百三十三回 昭和二十二年四月七日 当番 時任

今日ハ特に宮部先生の米寿（今月二十七日誕生日）を祝し併せて高岡君及時任の喜寿も記念す

今日の会が三三三回というは面白い

時任の甥が鹿児島に帰省の途中元本会の一員であった奥村君の未亡人に姫路に於て奇遇的に遇った話など出て何時もの通りなごやかな会合であった

第三百三十五回 昭和二十二年七月九日 当番 半澤

南瓜の芽たて（三本たて）の話に花が咲きました

第三百三十七回 昭和二十二年九月二十九日 当番 宮部

米国の友人から送って呉れた食料を供する事が出来て嬉しかった

戦後の食糧難が未だ癒えていない様子が伝わる。

第三百三十八回 昭和二十二年十一月十六日 当番 高桑

学校の土地の売却、立木を切ることの話あり

半澤先生の鈴木さんシベリアより目出度し、又、南瓜の三本立などの話も出た

第三百三十九回 昭和二十三年一月廿八日 当番 時任

去る二十三日より札幌に午後九時後ロウソク送電始まる。其の中で実際ロウソクによらぬ夜を選んでこの村会を開く

旧会員小倉鉦太郎君軽微な脳溢血を病むと聞き連名の見舞状を送る

第三百四十回 昭和二十三年二月二十四日 当番 高岡

日本全体に寒波襲来為めに寒気凜然昨朝は（－）十三度 今朝は（－）十四度  
第三百四十三回 昭和二十三年五月廿一日 当番 宮部  
二十三日が満月ですから十三夜の月夜を扱んだのです  
村会は可成月夜の日に開催してほしい

近頃耳が急に遠くなつて来たので皆様の御話が充分聴き取れないのは遺憾です  
第三百四十四回 昭和二十三年六月二十五日 当番 高桑

時任先生より美しく咲きほこるバラを頂き部屋も明るくなつた様であった  
第三百四十五回 昭和二十三年七月三十一日 当番 時任

七時半より八時近く迄は例の「二十の扉」の放送を聴く

第三百四十六回 昭和二十三年八月九日 当番 高岡

元会員宮脇君の出札を機械に本日村会も開いたところ全員出席  
新制大学問題等の話に花が咲いた

終戦から2年後の昭和22年10月に政令により北海道帝国大学から北海道大学に改称しているが、制度としては、昭和24年5月31日、国立学校設置法により新制北海道大学が設置された。

第三百四十七回 昭和二十三年九月十五日 当番 半澤

十字科（アブラナ科の別名：引用者註）植物に然るべき病害根癌病が出現した由注意を留することなど話された

第三百四十九回 昭和二十三年十一月十三日 当番 宮部

塵芥処理手数料に対し抗議の意見が出た

第三百五十回 昭和二十三年十二月十六日 当番 高桑

諸先生例の如くお元気なり 七時半から三十分間停電で暗いなかでの一時にお話も些か腰折れの感なり、九時半から又停電というふのではありがたい会合であつたのは時節からとは云へ残念でした

第三百五十一回 昭和二十四年二月九日 当番 時任

宮部先生は一月中旬肺炎にて小田切病院に入院、一時危険と伝えられたが其後順調に回復せられて居ると事

我等ハ村会に先生の出席の一日も早からんことを祈って止まない

第三百五十四回 昭和廿四年六月十一日 当番 星野

松島屋藤喜太郎氏より宮部先生御病氣全快の祝として菓子の寄贈あり尚富藤氏ハ村会に対し「札幌市の将来は斯くあるべきであると言ふ事」に対し指導を願ふとの申し出ありたり

第三百五十五回 昭和二十四年八月十三日 当番 宮部

借地払下げの件につき星野委員長から報告があり、今夜の話題の主なものであった

久しぶりに宅地問題が村会で話題となる。結局、昭和27年秋に「博士町」の全区画が大学より払下げとなった。

第三百五十六回 昭和廿四年十一月十日 当番 高桑

時任先生より美しきバラを頂き卓を飾った。星野先生より庄内柿の由来をお聞きした。借地払下げの話から税金の話に移り皆様御元気でお帰りになった。雲間に月を見る

第三百五十七回 昭和二十四年十二月二十六日 当番 時任

懸案の土地問題、日光付近の今朝の地震、宮部先生健康法等に話は尽きず…

第三百五十八回 昭和二十五年一月十二日 当番 高岡

一九五〇年最初の会合、生憎外は吹雪ふりしも全員出席  
ストーブを囲んで快談、十時解散 ブラジル□□氏送附のドロップ珈琲等を共に味った

第三百五十九回 昭和二十五年二月廿一日 当番 半澤

森本厚吉氏葬儀の話や恩給増額運動について話す

森本厚吉は札幌農学校19期生で、同期には有島武郎のほか、「博士町」住人である、星野勇三、半澤洵がいる。そのため、逝去の話が村会での話題となり、書き留められたのであろう。

第三百六十一回 昭和廿五年四月二十七日 当番 宮部

今日は私の誕生日に当りましたので、皆様から見事な紅白のペラゴニウム（ゼラニウムの別名：引用者註）の鉢を御祝い下され重ね々の御芳情に対し深く感謝して居ります  
皆様の御長寿と御幸福を祈って居ります

第三百六十二回 昭和二十五年六月十二日 当番 高桑

時任先生が「まり藻」はgreen tearsといふからお尋ねになったことから（正しくはgreen alga：引用者註）故新島先生に「まり藻」についての歌があったが遂に歌ってもらへなかったと宮部先生の思ひ出話があった

第三百六十三回 昭和二十五年七月三十一日 当番 時任

此頃は連日連夜の酷暑と干魘に苦しめられるたる処今夜半村会の散会間際に大雷雨となり附近に落雷して殆んど全市停電となつた。村会としてはそれまで嘗てない事であった

村会日誌の囊の破れを新しい布で修理して下さったことを本会は厚くお礼申し上げます

（附記）此日より翌日に掛けての大雷雨は雨量一八五耗上り明治二十二年来の記録なりとのこと

第三百六十四回 昭和二十五年八月三十一日 当番 高岡

時任君よりばら花寄贈多謝

二百十日の前夜なれど頗る平穩無事、本年豊作も請け合い□

第三百六十五回 昭和二十五年九月廿九日 当番 半澤

十月一日調査の国勢調査の話をする 宮部先生が若い時から人の姓名を思ひ出せぬので外国で非常にこまられた話など愉快に伺いました

明日ハ北大学長の選挙日  
〈二日目〉

この選挙で選出されたのは、第6代学長の島善鄰である。

第三百六十七回 昭和廿五年十二月二日 当番 宮部

全会員諸君が御来会されまして嬉しく存じ上げました

私の満九十歳を祝って日本学士院の会員諸志より贈って呉れました署名入りの賀状などを御覧に入れました

第三百六十八回 昭和二十五年十二月三十日 当番 高桑

宮部先生が昔釧路地方を旅行された時のお話の中に当時はアイヌで日本人を使って網場をやっているのが居たといふ事を伺って感慨深かった。又リンゴの話から宮部先生が余市で

余市よいとこ天狗の巣

どっちむいても緋の衣

といふ楽書を見たといふお話もあった

第三百六十九回 昭和二十六年一月三十一日 当番 時任

宮部先生は本日六日札幌市立病院に入院されて経過良好と聞いてゐるたが此頃停頓の情態なりとのこと

一日も早く全快の上村会に於てお眼に懸かり得る様祈ります

第三百七十回 昭和二十六年二月二十三日 当番 高岡

宮部先生はなお入院中故欠席、一日も早く御全快を祈る

本日挙行の北海道議会議事堂落成式の記念品を示した

第三百七十一回 昭和二十六年三月三十一日

宮部先生御宅

今月の当番は半澤なるが宮部先生御宅からの御申出により追憶の会を開催 宮部一郎氏を加へ六名集会でした

宮部先生には一日も早く御全快になり村会にてお目にかゝりたく一同の希望も空しく十六日午後四時半御逝去遊はされました 誠に哀悼の至りに堪えません

この当時の村会構成メンバーの中では、宮部は新参者ではあるけれども、最長老であり恩師でもあることから、彼らの精神的支えとなっていたのであろう。当番の自宅で開催の原則を変え、宮部宅において宮部金吾を偲ぶ村会が開催された。

第三百七十三回 昭和二十六年五月二十五日 当番 星野

夏時間の為め七時には早きに過ぐる様に感ぜられ自然集まりは遅くなりました

第三百七十四回 昭和二十六年六月三十日 当番 高桑

時任先生より綺麗なバラを沢山頂きました

今年は開学七十五年にあたるよし、二十五年のお祝いの時には赤い燕尾服を着られた事などの思い出話があった

そのあとで恩給の話が出たりして…

創立25年の時は、4年生であった星野、半澤ら19期生は全員で揃いの赤い燕尾服を誂え、記念に写真も撮影している。

第三百七十五回 昭和二十六年七月三十一日 当番 時任

七月中旬迄低温にて凶作の兆しありしが俄然高温となり愁眉を聞く、今夜の村会には団扇は離せなかった

この手帳の残頁を調べると、毎回一頁を用うるとすれば凡そ三百九十六回位でなくなる勘定である。そこで四百回迄記録し得る為に三百八十七回迄は二頁内に三回を収録してはどうですか

第三百七十六回 昭和二十六年八月三十日 当番 高岡

高倉君を会員に加うることを決定、時任君に交渉を一任した

第三百七十七回 昭和二十六年九月十七日 当番 半澤

高倉君は公約之ため欠席

第三百七十八回 昭和二十六年十月十九日 当番 星野

高倉氏入会后最初の出席にて学生部長たる氏より学生の思想問題などにて聞く処ありたり

この回から、第375回の時任の提案を受けて、2ページに3回分が記録される。また、理由は不明であるが、高倉新一郎がようやく村会に招待された。

第三百七十九回 昭和二十六年十一月二十九日 当番 高桑

高倉先生御加入にて些か趣が違ふ様に思はれる

そのうちしっくりとなる事であらう。宮部先生が足がふくれて靴をはくの困難された事の話が出てなつかしい事でした

第三百八十四回 昭和二十六年十二月二十四日 当番 時任

雪少なく且つ暖き年の暮れなり

第三百八十一回 昭和二十七年一月二十五日 当番 高岡

客員として宮脇君

宮脇君が渡米中写影せられた映画等を写され皆な大悦び 又同夫人より手製の菓子の寄贈、話はずんで十一時解散

昨日来降雪積もる事一米、然し無風であったのは幸いでした

第三百八十三回 昭和二十七年三月廿八日 当番 星野

高倉学生部長中心に話ハ過般の学生逮捕事件ニ関するが多かった

同年3月18日に学生と職員の計2名が武装警官に逮捕される事件がおこった。

第三百八十四回 昭和二十七年五月五日 当番 高桑

出席者

高岡先生、時任先生、全夫人、星野先生、全夫人 半澤先生、全夫人、  
高倉先生、全夫人宮部一郎氏、全夫人、新島夫人  
宮部家東京へ御引上げも近づき去る二日には豊平館で宮部家の招宴ありき、かねて四百回には夫人を交へてとなつてゐたのであるが、この機会に宮部家とお別れの会を催したらば如何かといふ事に何といふ事なしに一致した。それならば新島未亡人をもお招きしようといふ急にお知らせした。高岡先生夫人御病床にて御欠席は残念至極、星野先生夫人神経病も直られて御出席は喜ばしかった。高倉夫人少し御不快なりしも特に乞ふて御出席を得た。高桑妻は神病にて病床のため失礼したのは申し訳なし  
皆様お揃ひの所で今村が写真を撮り記念とす。男組女組と夫々歓談に時のつのも忘れ十時すぎ散会となった。席上宮部先生の自叙伝に載せる大学村に関する原稿（主として半澤先生筆）を高倉先生に朗読して頂き過去を偲んだ。新参の高桑がこの会の宿をする事が出来たのは光榮至極である。  
思へば宮部先生最後の御出席の村会は拙宅であつた。御縁浅からず思はる

100回区切りの記念以外で久しぶりに夫人同伴の村会が催された。なお、本稿の冒頭に掲載した一文は、「宮部先生の自叙伝に載せる大学村に関する原稿」の一部である。

第三百八十五回 昭和二十七年六月二十四日 当番 高倉

高倉の家で最初の会合

時任先生より見事なバラをいたゞき、これを中心にして語り合つた

第三百八十六回 昭和二十七年九月十三日 当番 時任

時恰も衆議院議員選挙を十数日の後に扣えて世間は騒がしきも村会は閑知せざるもの如し

第三百八十七回 昭和二十七年十月二十九日 当番 高岡

時任君は座骨神経痛なりしも出席。同氏よりばらの花寄贈多謝。高倉君より満州の写真を展示

第三百八十九回 昭和二十七年十二月二十六日 当番 星野

高倉君ハ旧宮部先生宅ニテ学長の部課長招待会ありしとて少しく遅刻せられた。  
宮部先生宅ハ宮部記念館として□大学の所有となつたのであります  
村会議ハ特別の事も無かりしが本年十一月予定の第四百回につき色々話しがありました

宮部宅跡地は、現在「宮部記念公園」として整備されているが、それ以前は、宮部宅をそのまま「宮部金吾記念館」として一般に公開していた。なお、現在は植物園内の旧動植物学教室東翼（明治35年竣工）を「宮部金吾記念館」とし、展示品はそこへ移している。

第三百九十回 昭和二十八年二月十三日 当番 高桑

全員出席 静かに降り積もる雪をわけて例の如く参集  
時任先生のズボンが小さくなってあれもこれも駄目、とうとうモーニングのズボンを出したとて縞ズボンで来られた 高倉先生は御来客や、遅刻された、高桑引きつゝいての出展のため延引していた二十八年度第一回の村会は四方山話のうちに時が過ぎ十時すぎ静かに散会した

第三百九十壺回 昭和二十八年三月十九日 当番 高倉

何時もの通り同窓を中心とした昔話などを中心に楽しい時間を持った

第三百九十三回 昭和二十八年五月二十六日 当番 高岡

既に五月末なるに気候依然寒くストーブをたく

第三百九十四回 昭和二十八年七月二十八日 当番 星野

半澤家にて都合あり順序を繰かへ開会せるものなり

然るに半澤君ハ出張の為め欠席となりしハ遺憾なりき

茅沼炭礦ニ日本最初の鉄道敷かれたりとの説ありその話が高岡氏より出でたる位の外ハ特記すべき無し

第三百九十六回 昭和二十八年八月二十九日 当番 高桑

出席全員

客員として宮脇先生

急に冷えて来てストーブに少し火をいれた方が快いといふので少し炊く 宮脇

先生学長を辞せられ東京へ移られるよし、日露戦争前の洋行の話から学生時代の話など例の通りなれど、宮脇先生のためことに活発になり時に洪笑が出た。来る二十八日に四〇〇会の行事をかねて宮脇先生を送る会を開くことを決めて十時半散会

第四百回 昭和二十八年九月二十八日 当番 半澤・高倉

出席

宮脇夫妻、高岡先生、時任夫妻、新島夫人、星野夫妻、半澤夫妻、高桑夫妻、高倉夫妻

前回の決議に基き、宮脇先生を送る会と共に第四百回行事として家族相寄り宮部会館で晚餐会を催す。五時、宮脇先生の最近ヨーロッパ土産である天然色写真の映写を見せて貰ひ、深い感銘を受けた。久しぶりの家族会でおそくまで賑やかに語り合った

元村会員であった宮脇富は、帯広へ転居後も訪札の度に村会に顔を出していた。そのため東京転居が決まったことにより、送別会を開くこととし、間近に迫っていた第400回を繰り上げて開催することになったようである。会場は当番の自宅ではなく、宮部旧宅＝宮部金吾記念館で行なわれた。

第三百九十七回 昭和二十八年十一月三十日 当番 時任

前回繰上四百回に高桑君の撮影せる写真が配布せらる

偶ま故新渡戸先生の二十年忌(1933 昭和八年十月十六日カナダ・ヴァン府に於て歿)に当るので先生の札幌農学校勤務時代(明治二四年より全三十年迄

一八九一—八九七）の先生に就て語り合い高倉先生を煩はしてメモを取って貰い昨夏来札せる先生夫妻の甥に当るエルキントン氏との約に従い「札幌勤務時代の新渡戸先生」を同氏に書き送る資料とした。

新渡戸稲造は、昭和8（1933）年カナダのバンクーバーで亡くなった。また、札幌農学校勤務時代はここに記されるより前後ともに長い。しかし、明治24年以前は留学のため不在、明治30年以後は在職しているものの既に札幌を離れて生活の中心を東京に移していた。そのため「博士町」住人は札幌勤務時代を札幌農学校勤務時代として書いたのであろう。

第三百九十八回 昭和二十八年十二月十八日 当番 高岡  
本年度最終の村会、半澤君は旅行、高桑君は先約の為め欠席  
本月に入り暖気加わり地上の雪溶く

第四百回は昭和二十八年九月二十八日宮部記念館に於て開催済み。

## むすび

『村会日誌』は、この後も連綿と綴られるが、紙面の都合と、筆者の筆跡解読能力の限界もあり、本報告では第二冊目400回を区切りとした。また機会があれば、以後の分も紹介を続けられればと思う。

最後に、「博士町」住人は、「村会」に対してどのような想いを抱いていたのか。半澤洵が書いた以下に掲げる文章に、その様子を偲ぶことができるであろう。

老学者たちの清談和楽、そして年経りし深き交友と稀に見る師弟の厚き結ばれ、かゝる世に、かゝる微笑ましき集いがつゞいていたのである。

〔参考文献〕

- 1) 金子信尚『北海道人名辞書第二版』北海民論社、1923年
- 2) 「郊外繁盛記 桑園方面 博士町の草分け」(『北海タイムス』1927年9月10日)
- 3) 宮部金吾博士記念出版刊行会編『宮部金吾』岩波書店、1953年
- 4) 山口廣編『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』鹿島出版会、1987年  
稲葉佳子「阿部様の造った学者町…西方町」47～60頁  
藤谷陽悦「大和郷住宅地の開発」133～152頁  
藤谷陽悦「堤康次郎の住宅地経営第一号…目白文化村」153～174頁
- 5) 宍戸實『軽井沢別荘史 避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年
- 6) 『北海道大学新聞』第一巻～第四巻、大空社、1989年
- 7) 池上重康「文化生活と住宅」(札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫82 北の生活具』1997年、第2章 札幌の町並みと住まいの歴史) 136～174頁
- 8) 片木篤、藤谷陽悦、角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、2000年  
池上重康「北海道帝国大学大学村／札幌」53～68頁  
石田潤一郎「北白川・下鴨／京都」245～260頁
- 9) 北海道大学125年史編集室編『写真集北大125年』2001年

(いけがみ しげやす／北海道大学大学院工学研究科助手)